



**早稲田大(東京)
2年連続3度目の優勝**

**第48回
全日本大学男子
選手権大会**

平成25年9月7日(土)～9日(月)
大阪府大阪市/舞洲運動広場

日ソ協記録委員 本間恵美子

大阪市の都心部から少し離れたところに位置する舞洲運動広場は、舞洲アリーナを中心に各種スポーツが開催でき、開会式は舞洲アリーナにおいて行われ、「関西大倉高和太鼓部」の演奏で熱戦の火蓋が切られた。

今大会には、全国の精鋭32チームが集い、「日本一」の座をめざし、熱戦が繰り広げられた。

大会初日は天候に恵まれ、1回戦16試合を順調に行うことができたが、2日目が前夜来の雨となり、晴れ間を待ち、11時過ぎから試合を開始。この日の最終試合はナイトゲームとなり20時過ぎまでかかったが、何とか予定された試合を行うことができ、ベスト4が決定した。

記録面では、準々決勝の日本体育大対関東学園大の試合で、日本体育大・河野拓郎が大会史上12人目のノーヒット・ノーランを達成した。

〈準決勝〉

日本体育大	00200000	2
早稲田大	0051000x	6

(日) ●河野・齋藤・山内
(早) ○古川・西村・沓澤
▽(審) 吉田(早) 古敷谷、遠藤(日)
(記) 今村、大嶋(早)
(審) P北山1増田2西久保

3西積

〔記〕小川

1回戦、2回戦、準々決勝の3試合をすべてコールドで勝ち上がり、連覇を狙う早稲田大は、準決勝で大学男子ソフトボール界の「強豪」であり、「名門」でもある日本体育大と対戦した。日体は3回表、1番・古敷谷がライト頭上を越える三塁打を放ち、出塁すると、一死後、3番・遠藤のライト線にポトリと落ちる幸運な適時三塁打で、まず1点を先制。二死後、5番・湯浅がレフト前に適時打を放ち、この回2点のリードを奪った。



攻守でチームを牽引した日体のキャプテン・遠藤

日体が有利に試合を進めるかと思われたが、その裏、すぐに早稲田が反撃。この回先頭の7番・北村の四球を足掛かりに、9番・大嶋の二塁打で一死

二・三塁とし、1番・兼子の投ゴロの間に本塁突入を試みるが、これはタッチアウト。さらに四球で満塁とし、3番・溝口の適時打で同点に追いつき、4番・吉田が右中間を深々と破るランニングホームラン。この回一挙5点を挙げ、試合をひっくり返した。続く4回裏にも四死球の走者を置き、1番・兼子にエンタイトルツーベースが飛び出し、1点を追加。

守っては、古川、西村の投手リレーでこのリードを守り抜き、6―2で勝利を飾り、決勝進出。2年連続3度目の「優勝」へ大きく前進した。

〈準決勝〉

同志社大	33000000	6
高知工科大	10000000	1

(同) 佐復・○佐野・茶畑
(高) ●安堵・赤木・上瀬
▽(審) 今井(高)
(記) 中原②、佐野、根岸、神保(同)
(審) P家野1玉井2土師3泉
(記) 泉
先攻の同志社は初回から積極的な攻撃を見せ、2番・中原の二塁打を皮切りに、二死後、4番・瀬戸のタイムリで先制。さらに、相手チームの守備の乱れで1点を加え、6番・根岸の中

第48回全日本大学男子選手権大会

1	早稲田	11	0	8
2	京大	4	5	0
3	東大	3	8	7
4	阪大	10	0	3
5	立命館	0	3	8
6	香川	3	10	3
7	中日	10	3	3
8	東海	3	6	1
9	日本	6	5	2
10	東国	7	9	1
11	鹿島	9	6	2
12	崇光	2	5	3
13	関大	3	6	2
14	九州	4	1	8
15	中国	8	4	1
16	大学	1	8	7
17	高知	4	4	2
18	関西	8	0	9
19	中国	0	7	0
20	常陸	5	2	0
21	九州	0	5	2
22	城大	0	0	4
23	中国	0	0	4
24	岐阜	0	0	4
25	沖繩	0	0	4
26	神大	0	0	4
27	信州	0	0	4
28	同志	0	0	4
29	社大	0	0	4
30	京大	0	0	4
31	東大	0	0	4
32	阪大	0	0	4

越二塁打でこの回3点を挙げた。2回表には、制球の定まらない高知工科・安堵が連続四球を与え、無死一・二塁となったところで、2番手・赤木と交代。しかし、結果的にはこの交代が裏目となり、3連続長打で同志社がこの回も3点を追加。存続で大きくリードを奪った。

一方、高知工科は初回に3点を先制されたが、その裏、3番・今井、4番・小山の連続長打で1点を返し、すぐに反撃。しかし、その直後の2回表に再び3失点。その後は得点を挙げる事ができず、決勝進出はならなかった。それでも、高知工科の本大会出場2回目でのベスト4進出は立派なもの。大会に「新風」を吹き込んでくれた。

《決勝》

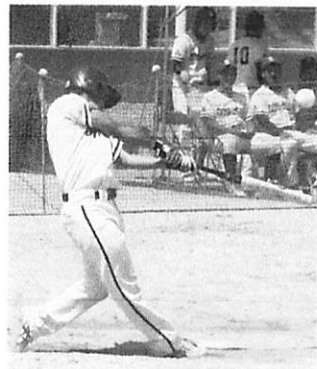
早稲田大 3 2 1 0 2 8
同志社大 0 0 0 0 0 0

※大会規程により5回終了時にコールド

(一) ○古川・西村・香澤
(二) ●佐藤・佐野・茶畑
(三) 三浦田(早) 三浦田(早)
(四) 三浦田(早) 三浦田(早)
(五) 三浦田(早) 三浦田(早)
(六) 三浦田(早) 三浦田(早)
(七) 三浦田(早) 三浦田(早)
(八) 三浦田(早) 三浦田(早)

昨年に続き一連覇を狙う早稲田と初の優勝をめざす同志社の決勝は、初回から早稲田が圧倒的な攻撃を見せ、毎回安打で得点を重ねた。

先攻の早稲田は初回、1番・兼子、



反撃を試みる同志社だったが早稲田の継投に抑え込まれた

2番・栗田の「技あり」の連打で無死一・二塁とし、3番・溝口が右越三塁打を放ち、二者生還。あっさり先制すると、続く4番・吉田のレフトへの犠牲フライで三塁走者・溝口を迎え入れこの回3点を挙げた。続く2回表には2番・栗田、3番・溝口のタイムリーで2点を追加。3回表には、4番・吉田の左中間最深部へ突き刺すプロ本塁打で1点を加え、5回表にも長短4安打を集め、2点を追加。14安打の猛攻で大量8点を奪い、大きくリードを奪った。

投げては、古川、西村の継投で同志社打線に得点を許さず、5回コールドで2年連続3度目の優勝を飾った。

一方、同志社は準決勝までの澆刺としたプレイが見られず、早稲田の大応援団と決勝の雰囲気は飲まれたか、2回裏、4番・瀬戸がフェンス直撃の二塁打を放ったのが唯一のチャンス。しかしこれも得点に結びつけることができず、準優勝に終わった。

大会雑感

大阪府協会広報委員長 喜夢口 廣治

全国各地の若人、大学生がここの大阪に集結。43年ぶりとなるインカレ、全日本大学選手権の開催となった。

男子は舞洲運動広場、女子は交野総合体育施設を会場に試合を行ったが、開会式は男女揃って舞洲アリーナで行い、関西大会高の演奏に乗り、男女4チームが堂々の入場行進。選手宣誓は、男子は関西大・片山卓美主将、女子は大阪大谷大・森下舞主将が行い、翌日から健闘を誓い合い、熱戦の火蓋が切られた。

9月に入っても猛暑が続く中、大会前日、例年通り、8面のグラウンド作り。各支部からの応援、近畿の大学ソフトボール部員の皆さんの応援もあり、滞りなく大会の準備を整えることができた。

大会2日目があいにくの雨となり、女子の会場は競技実施を断念し、予備日に延期。男子の会場は早朝からグラウンド整備に奔走し、11時過ぎに試合を開始できる状態にまでこぎつけたが、試合開始直後にまたしても無情の雨。それでも何とか競技を続行し、その日の最終試合は当然ナイター。試合終了は20時30分であった。

悪天候に振り回された大会ではあったが、それでも何となく無事に全日程を終えることができたのは、参加チームの皆さん、大学連関係者のご努力・ご協力と大阪協会の「組織力」の賜物ではなかったかと感じている。